豊竹古靱大夫を慰勵す

同人　中野　孝一

淨瑠璃史を詳しく調べてみたわけではないが、去年の暮から今春へかけてのやうに、名人級の老巧な大夫ばかり言ひ合したやうに次から次へとなくなつて仕舞つた大受難の年は、おそらく古今絶無ではないかと思はれるが、不祥事はこれに止まらず生き殘りの文樂座の第一人者豊竹古靱大夫も今まで大學教育までうけた男の子を二人まで先立てゝゐる上に、今度はその一粒種の愛息寅太郎君をも無常の風にもぎ折られたのみならず、今一人の血を分けた男の子――子といつてもすでに二十七にもなつた堂々たる獨立人――まで同じく病魔のために無慘に奪はれてしまつて、今悲愁と絶望のどん底に泣くにも泣けぬ毎日を送つてゐる。

サンデー毎日の五月のある號に山口廣一氏が「津大夫の死と文樂の危機」といふ一文の中でこの事に言及し「出征中の愛息津の子大夫の歸還、改名興行、結婚――と、目出度づくめのコースを辿つてゐるのを見屆けて往生した津大夫と、逆さごとに泣いてゐる古靱大夫の心事とを比べてみて、人生悲劇としては死むだ津大夫よりも、かけがへのない大切なものを失つた古靱大夫の方が遙に深刻なものがあらう」と、しみ〴〵と思ひやりの深い筆で書いてゐるが、全く死にまさる苦しみにあへぎ、寂しさに苛まれてゐることゝ察せられる。寅太郎君の亡くなつたのはあとの月の七日で、文樂の五月興行が始つて間もなくのころ、古靱は「太十」の後半を語つてゐたが、悲しみを肩衣に包むでその興行の千秋樂、二十二日迄ともかくも無事に床を勤め終へた。全く偶然の吻合だが、親の逆心の犠牲になる可憐の若武者重次郎と、寅太郎君とは同年の十八歳だつた「十八年の春秋を双の中に人となり――」と切なく搔き口説く操の述懐をどんな氣持で日々語り續けたらう！　又きくところによると寅太郎君は年端も行かぬに不思議なほどの大悟徹底の臨終だつたそうだが、そのしほらしさが親心には一入痛はしかるべく「父上、母さま、初菊殿――」と斷末魔の別れの詞を、ようまあ聲に出して語れたものと、想像するだけでも涙がこぼれる。私はこの時は文樂へは都合

がわるくて行けなかつたが、生々しい悲しみの渦卷いてゐる混亂した心をぶつゝけて語る淨瑠璃には藝術味の芳醇さなどとても求め得べくもなかつたらうが、さる代り父光秀と母みさをを通じて、昭和の名人古靱大夫がいかばかり激しい切實な恩愛の至情を奔騰爆發させた事だつたらう。おそらく書下しの時の麓大夫もとても及ばぬ、おそろしいばかりの實感的迫力に魂をゆさぶられたに違ひあるまい。いや、あまりに實感的悲情が濃厚でじつとしてきいてゐられなかつたらう—。

吾子が死んでも床は休まれない。生命と信奉してゐる床は斷じて休まない。こゝに藝道捨身の心構へを不言實行する第一人者としての痛ましさがあるのだ、これは世の常の人なら味はずともすむ、選はれた人道に殉ずるものゝ悲哀であり、文樂座の總帥として當然果さなければならない重大な責任でもあつたわけだが、凡そ口に言ひ易く行ひ難いことを彼は敢然として立派にやつて退けたのは豪かつた。十數年前、紋下竹本津大夫その母堂の訃に接するや、その時の役場——淨瑠璃の中で一番重い語物とされてゐる「忠九」をさへ捨てゝ急いで國へ歸つてしまつた事があつた。當時まだ健在で斯道の大先達として重きをなしてゐた石割松太郎氏が先鋒となつて紋下の責任論をたてに嗔ましくせめたてたものだつたが、私は議論としては正當でも、批難されてゐる當人の身になつて考へると、むしろ同情したくなつた「すぐれた藝術家たらむよりはまづよき人となりよき子とならむ」こういふしほらしい無理のない願望に燃えてゐるこの人を、どうして酷しくせめ立てる事が出來るだらう。今も猶この考に些か變りはないのだが、それだけに古靱大夫の行藏の悲壯さは一層强烈に心魂に徹するものがある。

「親と子とは違ふやないか」と、この私の異常な感激ぶりをこう一口に片づけて冷殺した人があつたが、親の死に對する哀別悲愁、子を先立てた愛着離苦——その愁嘆の內容は違つても、心に訴へる量感には輕重厚薄はないはずだけれども、各人の立場の異同もありさまゞ〳〵の角度から心理的に檢討して見なければ一律には定められまい。それはともかく、こういふ同じ不幸事に處する昭和淨瑠璃界の二巨人の態度なり心構へを考へ合せると興味は多いが、一方はすでに幽明境を隔てた人である。これ以上は語らぬ方が、死者への禮讃であらう

何はしかれ、傷みてやぶれぬ心　傷きて倒れず倒れて後止むの勇猛心——この心こそ、戰の庭に立つもたゝぬもひとしなみに持ちたき日本精神の根幹であり、大和魂の眞髓であるのだ。古靱大夫は齒をくひしばつて藝道日本の誇りの爲、且はこの意氣を後進に垂範、衰殘の斯道に活を入れるためのビタカンフアアたらしめむと實踐躬行したのだ。

私は六月十六日梅雨晴れの一日、久しぶりに文樂座へ行つた。津大夫亡きあとのこの古典藝術の殿堂を、弱り切つた心の双肩に背負ひ、殘燈明滅の孤壘に據つてその傳統を健氣にも死守してくれてゐる、雄々しくも悲壯な高座姿をまのあた

りにみて、人生に甘へすぎてゐる自分の心を鞭うたるゝ思ひがあつた。豫期はしてゐたが、何時も精氣潑剌たるこの人が思ひの外にやつれが目立つて痛々しいばかり、幕明直後のざわめきをもすぐに鎭靜させる枕の滋味もいつものやうには味へず、どことなくしつくりせぬ空々しい感がした。この間のサンデー毎日の野山草吉の週間人物評に「芝居の批評は單なる技術評に止まらず、その人の生活にまで温い眼をそゝいだ上でやらなければ――」とあつたのを至言だと心に留めてゐたが、こういふ筆法から言へばこの語物の劈頭の文句を語り活かせと注文するのは殘酷である「廓の內は萬燈會歌舞の菩薩の色揃へ」云々、華麗絢爛を極めた浮き立つばかりの廓情調は今の彼の心境からは、凡そ一番緣遠いものこんなに白け切つた空莫たるドカンと大穴のあいたやうな心でゐて、こゝが立派に語れたらそれこそ神業である。子を亡つた人なら解るだらう！　仕舞まで無難に勤めるだけが精一ぱいなのだ。

でもおのぶの登場によつて藝術的良心は俄然目をさました本來この曲はおのぶの素朴なひなびた奧州訛りが魅力となり味づけとなつてゐる如く、作者もこの娘に力を入れてかいてゐるやうに思はれるし、誰が語つてもおのぶを中心に熱演するのが定石らしいが、語り手のいぢらしい感傷は、おのぶの純な、あどけない、ひたむきな眞情に惹きつけられ、その心に融け込むではじめて藝術家としての自分にたちかへつたのではないかと思はれた。あの重い口に適はぬ田舍娘が實に生き〳〵と活躍した。わけても心を強く撲つたところは、宮城野を姉と確認して驚喜する場面――その二人のイキ合は無類で「オ、姉さあでどざるかいのふ」と語尾を顫はして嬉し泣きに泣き入るところは、聽手も語手と同じ息にあへぐほどのどえらい感銘を享けた。あの短い一聯の會話がこうまで美しい印象となつて殘つてゐるのは、この一二句が、情の眞髓をその妙機を、いみじくもえぐり出してくれてゐるからである生きた人間の息吹き――血肉の疼きが、誠實の深淵から噴泉となつて迸出するが故である。こゝが全曲中の壓卷であるのは勿論で、武智氏の所謂エスプリ、ユマニテの純化高揚せる妙所なのでもある。しかしこれは決して技巧の練磨だけで至り得る境地ではない。苦勞が涙でねり上げられて技巧の圓熟と融け合つて自然に渾成されたものなのだ。

この間死んだ土佐大夫の伊達大夫が若いころ、櫻丸切腹の段の白大夫の念佛の件りを、師匠大隅大夫に二晩も三晩も立て連けに叩きこまれて、屁古垂れたといふことが、この道の修行が如何にむつかしいかといふ一つの例話――訓話として傳承されてゐるが、實に下らない話だと思ふ。機緣が熟してほんとに體得さるべき事を、反覆修練することによつて一氣呵成にものにしやうとするのは笑止だと私には思はれる。又しても體驗萬能論を振りかざすやうだが、藝の上の苦勞だけで、人生の酸苦をなめない人の淨瑠璃は、いくら上手で面白くても、ねつから頭が下らない。血と涙に滲むだ情の頌歌で

あつてこそ、はじめて帽をとる氣になれるのである。

以上私はあまりに精神的感銘にのみ隨喜しすぎ、もつと一般的な魅力の重要素たるべき音曲としての感覺的快味を愆賞することを閑却したきらひがなくもないが、それは斯曲が詞の綾と生命感の流露に重きをおいたものであるからでもあり又今までこの人の藝のこういふ味については、私としては言ひ古してきたことでもあるからで、一番心の中樞に響くもののみが肝心で、節調の美しさに陶醉するのをそれが感覺的であるがゆゑに輕んじてゐるわけでは決してないのだ。

閑話休題——前に引用させてもらつた「津大夫の死と文樂の危機」の文中、山口氏は次のやうにかいてゐる。序だから今一度引用させて頂く。

「古靱の一字一句も忽せにせぬ合理主義の語り口は往々にして舞臺を淋しいものにする。玄人に受けはよくても大向ふが津大夫ほどに沸かない。津大夫の藝には花やいだ明るさと大きさがあつた。これに對する古靱大夫は人間としても、藝質としてもむしろ陰性に屬する人だ。今後の古靱大夫獨り天下の文樂にこの暗さだけは懸念である。とはいふものゝ古靱大夫も近世の巨匠たるにはぢない大物だ。おそらくこの人の存在は文樂最後の生命線かもしれない健康のすぐれぬ人だけに今後の自重を祈つてやまない」云々と、このやうにたいへん悲觀的なもので「文樂も、もう駄目だそうですね——」とこれを讀むだほどの人は、皆そういつてきく。私は今更らにジャアナリズムの宣傳力の偉大さにおどろいてゐるわけだが、まあ、それはそれとして私の第一に腑におちぬのは「玄人仲間の受けはよくても大向ふが津大夫ほどにも沸かない」といふ一事である。前受けなんてものは申すまでもなく一種の浮薄な雷同性の人氣で、藝の眞價にあまりかゝはりのない事だからこんなことで力みかへつてかれこれ言ふのは、甚だ大人氣ない次第だし、津大夫の問題には今は觸れたくないのだが藝の本質はともかく、津大夫位前受けのよくない人は尠なかつたと私は思つてゐる。その前受けのわるさに超然として、特有の熱と力のひた押しで聽衆の魂をしつかり掴むで離さないそこに豪さがあり、魅力があつたので、あの晦澁の節調、間と足取りのわるさには往々一種の忍苦を強ひられ勝でさへあつた。それにすら古靱の藝の感覺的部分の感銘が猶及ばないと言ふことは不思議でたまらないのである。山口氏のあの一文を讀むで、文樂座と人形淨瑠璃に對し、あまりに悲觀しすぎた人々は、古靱大夫の藝力が津大夫に遙に劣ると思はせられ、致命的な失望を感じ取つたが故であらう。

今一つは「暗さについての懸念」に對していろ〳〵のことを考へさせられたからである。しかしこれは全く山口氏のお說の通りで、異見があるのではない。たゞ私がことさらこの一文を引合に出させて頂いたのは、古靱大夫はこんなことに深く心を勞する勿れと激勵したかつたからに外ならない。

この人は度々書いてきたやうに、今悲愁に埋もれてゐる人

である。だが、その悲しみに負けてしまふ人でないことは、その渦卷の中にゐながら、自己の藝術を見失はなかつた健氣さによつてよく立證されてゐる。哀慟の嵐は去つたがひしひしとせまる悲しみと淋しさは寔にたへ難いものがあらう。

その無と絶望の底から滾々として湧き出づる泉の如きものこそ彼の藝術の本尊なのだ。それは暗くもあらうし淋しくもあらう。がそれが宿命的な持味である限り私共はよろこんでこれを享け入れたい。どうか貴重な體驗を空しうせずその持味を純化沈潛せしむることにのみ專念せよ！天がこの人だけにほんとの深い味の淨瑠璃を完成せしむる爲に降した恩寵的試練を生かせ、暗くとも、じみ過るとも、彼の天來の妙音は古風を苟くもせぬ本格藝の埒を越ゆる事なく、縱横無凝圓轉滑脫の機能を思ふ樣發揮してこれに一層協力すべきである。

こういふ音曲的美感は、藝術味の芳醇さを湛へた高度のものであるのは勿論、又俚耳をも樂しませるに足る普遍的魅惑も豊かで、私共を欽賞恍惚たらしむるものであるのは申す迄もない。彼の藝はもつと萬人に歡ばれるものをも多く持つてゐるはずだ。重ねてこゝで前受を顧慮せず、暗さを氣にせず自信滿々として精進一途を辿られむことを進言する。

天、この人に壽をかし、古靱大夫又この上に自愛加餐して百尺竿頭に一歩を進むる研鑽工夫に懈怠なくんば、掘り下げ掘り起される藝境は私共の想像を絶した、深刻無比豊麗極りなき完成美を現出するであらう。

そして量的に缺けたゝめの文樂座の危機を、必ず質的に補塡して餘りある盛觀を招來するものと、固く信じて疑はないのである。（完）

祝第四百號發刊

笠岡子猿會

新淨瑠璃作者　齋藤如牛
西山登雀
小林霞江
今城可笑
鶴田瓢堂

撫順　豊澤猿子
岡崎竹造